

## 高校生のグループ学習における アサーション・トレーニングの効果

Effects on the assertion training in group learning of high school students.

中島利奈

Rina Nakajima

立命館大学大学院応用人間科学研究科

Ritsumeikan University Graduate School of Science for Human Services

Key words: アサーション・トレーニング, グループ学習, アサーティブ

### 目的

グループ学習の先行研究において、長田・川上 (2008) は、学校教育では主体的な学びや共同的な学びの重要性が強調され、少人数の話し合いによるグループ学習を取り入れた授業が多く見られるが、それらの中には、グループで行われている実際の話し合いが学習課題の達成に対して有効に機能していないケースも見受けられると主張している。また、橋本 (1994) は、グループ学習の問題点として、「危険な人間関係がある場合に、それがさらに進む場合がある」、「力のある子の追求を鈍らせる場合がある」、「力のある子・集団の圧力に屈服する子が出る場合がある」、「集団思考により、むしろ低い考えが出されてくる可能性がある」という5つの事項を挙げている。つまり、グループ学習が有効に活用されないケースも存在する。そこでグループ学習や話し合いに影響を与えるとされる、主張性や認知的共感性を養うためアサーション・トレーニング(以下ATと記す)をグループ学習に取り入れる。アサーションとは“相手を尊重しながら自己主張をする”ことである。ATの3つのスタンス(アサーティブ、非主張的、攻撃的)の表現方法について理解することで、グループ学習においてもアサーティブな表現を生かし、充実したグループ学習が可能となると考える。以上より本研究ではグループ学習におけるATの有効性について検討することを目的とする。

### 方法

参加者 私立高等学校3年生 (男子5名, 女子20名)

材料 ATに関するパワーポイントとそれに伴うプリント, 事前・事後アンケート, アサーション度チェック・リスト

手続き 事前アンケートを取り、主張性・認知的共感性の高低、グループ学習に対する充実度を測定する。回答後、ATについて説明を行い、平木典子 (1997) の尺度を参考に作成したアサーション度チェック・リストによってアサーション度を測定する。その後、ロールプレイを体験し、ATについて理解を深めた上でグループ学習を行う。最後に事後アンケートを行った。事前・事後アンケートにおいては、倉盛 (1999) と山川 (1997) の尺度を参考にしたものを使用し、回答を求めた。

### 結果と考察

事前・事後アンケートの結果を比較すると、一人あたりの平均点は108点満点中79.52点から88.72点と9.2点得点が上昇した。また、アサーション度の測定により平均値を出し3つのタイプに分類した結果、アサーティブ11人、非主張的・攻撃的7人、不明(複数回答・未記入・未提出者)7人という結果になった。この結果を踏まえ、事前・事後アンケートの結果を分類するとアサーティブ9.73点上昇、非主張的・攻撃的12.57点上昇、不明5点上昇とそれぞれのタイプで得点の上がり方に違いがあることがわかった。特に、非主張的・攻撃的タイプが一番得点の伸び率が高く、ATの効果があったという結果になった。また、グループごとに事前・事後アンケートの合計点の差を分析すると1班15.6点、2班6.4点、3班6点、4班10.3点、5班9.1点の上昇がみられた。この結果と各班のアサーティブ度を比較すると1班、4班、5班はアサーティブ度が2班、3班に比べて低く、ATを意識したことにより、より充実したグループ学習ができたと考えられる。ATによってグループ学習の充実度だけでなく各生徒の主張性や認知的共感性を高めるという双方のメリットがあることから、今後は、長期的な取り組みによって更に充実したグループ学習が促進されることを検討していきたい。

### 引用文献

- 倉盛 美穂子(1999). 児童の話し合い過程の分析—児童の主張性・認知的共感性が話し合いの内容・結果に与える影響— 教育心理学研究,47,121—130.
- 長田 在代・川上綾子(2008). グループ学習の話し合いにおける認知的共感性の影響 日本教育工学会論文誌,32,141—144.
- 橋本 定夫(1994). 異なる考えが生かされる過程 現代教育科学,37,60—62.
- 平木 典子(1997). アサーション・トレーニング—さわやかな<自己表現>のために— 金子書房
- 山川 信晃(1997). 自己学習・グループ学習を取り入れた授業とその評価 関西外国語大学研究論集,66,413—429.